

# 社会的共通資本としての 都市のみどり



東京大学大学院 工学系研究科  
都市工学専攻教授

いしかわ みきこ  
石川 幹子

地球環境問題への具体的取組  
みとして、低炭素化社会の実現、  
生物多様性や水循環の回復、ヒ  
ートアイランド現象の緩和など、  
都市の在り方そのものを、根本  
から見直す施策の展開が進んで  
いる。この課題に対し、大きな  
役割を果たしているのが、都市  
のみどりである。

現在、世界のさまざまな都市  
で、みどりを基盤に据えた都市  
再生のさまざまな取組みが行わ  
れている。成功している事例の  
多くは、都市のみどりを、単な  
る物的環境として捉えるのでは  
なく、それぞれの都市固有の歴史、文  
化を包含する「社会的共通資本」とし  
て捉え、市民参加を自明のシステムと  
して組み込みこんでいることにある。  
一例としてあげるのが、ボストンの  
「ビッグ・ディッグ」である（写真1・  
2）。このプロジェクトは、1950年  
代に都心の歴史的街区を縦断して建設  
された高速道路を地下化し、上部を公  
園としたものであり、約30年の歳月を  
費やし、昨年、完成をみた。多額の税  
の導入を巡り、工事の過程では批判が  
続出し、資金回収のため、地上部にお

## ビッグ・ディッグ（ボストン）



写真1 高速道路を取り壊し、地下化の工事風景（2003年）



写真2 写真1と同じ地点の現在の風景（2008年）  
地上部は、公園となっている。

けるビル建設なども検討されたが、結  
果的には、すべての区域が公園となり、  
都市に大きな活力を生み出している。  
この「みどりの都市計画」は、決し  
て新しい考え方ではなく、ボストンで  
は、19世紀後半に、大小のみどりを公  
園道路により繋ぎながら、都市の骨格  
を創り出した「エメラルド・ネットワーク  
」のプロジェクトが実施され、世界  
の都市計画に大きな影響を与えてきた。  
今回の「ビッグ・ディッグ」は、百年  
の時を経て、その歴史的・文化的スト  
ックを継承したものである。

日本における「みどりの都市計画」  
も、近年、目覚ましい進歩がみられる。  
この動きを後押ししてきたのは、市民が  
主役となりうる仕組みが、徐々に創り  
出されてきたことにある。中でも都市  
のみどりの長期ビジョンとなる「緑  
の基本計画」が、1994年に法定計  
画となり、地方分権の動きを背景とし、  
策定主体が市町村となり、活発な市民  
参加が可能となったことは、画期的な  
出来事であった。爾来、10年を経過し、  
いま、その実績が明らかになりつつあ  
る。



写真3 各務野自然遺産の森

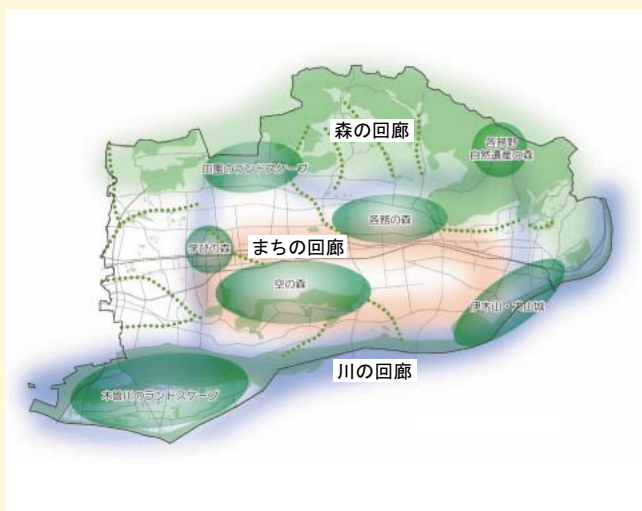


図1 水と緑の回廊の考え方



写真4 学びの森

この間、大きな実績を挙げている都市の1つに岐阜県各務原市がある。各務原市は、名古屋大都市圏の30km圏に位置するが、高度経済成長期に里山を切り開き、急速な市街化が進展した。土砂採取による山並みの変貌、地下水の汚染と枯渇、中心市街地の空洞化など、今日の郊外問題の縮図ともいえる都市であったといえる。

この一方で、開発の波が沈静化した1990年代頃から、市民の中に身近な自然環境を回復していかうとする静かな動きが始まった。市は、この動きに対応して、徹底した市民参加により、身近にある里山や、農業水路、木曾川などを結び、「水と緑の回廊」による「公園都市」の実現を緑の基本計画として策定した。

各務原市の計画の特色は、第一に、目標がわかりやすいこと、第二に、できるところから、すぐに実行していったこと、第三にワークショップを開き、市民と一緒に考える原則を徹底していることにある。

「学びの森」は、農場であった場の記憶を尊重し、伸びやかな牧草地の景観と美しい並木道を再生し、生物多様性を支える小川や池などの水循環を回復したものであり、隣接地に中部学院大学が新設されたことは、新しい活力が生まれ出されることとなった。

人口減少の時代を迎え、まちなかを、いかに魅力ある持続的環境としていくかは、大きな課題である。地方都市ならではの、ゆとりを活用し、詰め込むのではなく、まちの歴史を尊重し、場の記憶を継承する道を選んだ各務原市の試みは、みどりを社会的共通資本として捉え、市民自らが、考え行動する、これからのみどりのまちづくりに、ひとつの示唆を与えている。

図1は、地形の特色にあわせた、3つの回廊（まちな回廊、川の回廊、森の回廊）と、これらを結ぶ7つの拠点を示した目標像である。写真3は、森の回廊の拠点として、里山の自然の保全と水

執筆者プロフィール

1972年東京大学農学部卒業、94年東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了。工学院大学工学部建築学科教授を経て、99年慶應義塾大学環境情報学部教授。2007年より現職。みどりの学術賞、日本都市計画学会計画設計賞受賞（2008年）。日本学術会議会員。